
つまり真ん中で良くね？

瀬見尾津風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つまり真ん中で良くね？

【Nコード】

N8363S

【作者名】

瀬見尾津風

【あらすじ】

「男で女な神の使者」の番外編SS集。ぶっちゃけ、本編とまったく関係ないです。作者の自己満足および妄想です。本編よりも若干描写が過激で、一部BL色が強くなっております（ソールハロツシュ×マリアド）。閲覧の際にはご注意くださいませ。

・世界の謎その一

「この世界では、人間みんなが両性具有なわけだけど、子どもってどうやって作るんだ？」

「は？ 交尾するに決まってるじゃない」

と、返すネネルにマリアドが思わず突っ込む。

「おい、セックスって言え」

ネネルは構わずに説明を始めた。

「基本的に子どもを産むのは女の役目ね。でも、中には同性同士で結婚する人たちもいるから、様々だわ」

「ふうん……で、そのセックスはどうやって？」

「……恥ずかしいこと聞くのね、あんたって」

「セックスを交尾って言っちゃうお前に言われたくないな」

ネネルは口を閉じ、マリアドをじっと睨んだ。

そこへやって来たのは宮廷魔術士ソールハロッシュ。

「そんなところで、何を話しているんだい？」

「げ、一番会いたくない奴に会った」

「……マリアド、お願いだからオレのこと、もう少し信用してくれないかな？」

「嫌だ」

苦笑いを浮かべるソールハロッシュを見て、ネネルがぱっとひらめいた。

「マリアドがね、セックスについて知りたいんですって。実践付きで教えてあげたら？」

「な、なんてことを……」

目を丸くしながらも、ソールハロッシュの手はマリアドへと伸びている。

「あ、ちょ、いや、実践はいらない。っつか、その汚い手をどけろ」
「恥ずかしがらなくて良いんだよ、マリアド。さあ、オレの部屋で

じつくり」

と、腰を抱かれたところでマリアドの拳が彼の腹に入る。

「悪いな、別の人に聞いわ」

「……マリアド、それを私が教えるのか？」

「うん、口で良いから」

「……そう言われても」

と、視線を泳がせるヴェルシ。

マリアドは周囲に誰もいないのを確認してから、また彼女へ目を向けた。

「で？」

「そ、その、普通にやるぞ。本当にそのまま、普通に」

「普通じゃ分からねえよ」

「っ、だ、だから……」

ヴェルシが顔を赤らめだした。どうやら恥ずかしがっている様子だ。

「し、処女にそんなこと聞くなっ！」

と、その場から走って逃走するヴェルシ。

「……ぶっちゃけたな、ヴェルシ」

その背中を見送って、マリアドは今度こそ教えてくれそうな人の元へ向かう。

「簡単ですわ。男の×××を女の×××に挿入するだけですもの」

「やっぱりそうですか」

と、納得した様子のマリアド。

フィアンシーナ姫は何を思ったか、さらに付け加えた。

「男同士では、基本的に受が子どもを孕みますわね。女同士では、

両方子どもを産むこともあるそうですわ」

「そうそう、それが聞きたかったんですよ！」

「納得してもらえて良かったですわ。ちなみに、女同士ですと挿入

してもあまり気持ちよくありませんのよ。それなのに男同士では激しいセックスだって出来ちゃいますの。不公平だと思いませんか？」

「あー、それは確かに不公平かも」

「でしょう？ まあ、マリアドならどちらもいけそうですけれど」

と、マリアドの身体をじろじろと見やるフィアンシーナ。

「……試してみます？」

冗談でマリアドが言ってみると、彼女はすぱっと答えた。

「ごめんなさい。フィアンシーナは自分でやるより、見ている方が好きなのですわ」

爆弾発言だ。本編では絶対に見せられない一面である。

「……それはいわゆる、視姦ですか？」

「うふふ、さあ、どうでしょう？」

意味深長に笑うフィアンシーナに、マリアドはただ苦い顔を浮かべるだけだった。

・第二章 11~12

「……」

先ほどから、何やらソールハロツシュがマリアドを見つめていた。それも、マリアドの唇の辺りを。

「……妙なことを考えてるだろ、ソル」

と、マリアドが耐えかねて口を開くと、ソールハロツシュははつとする。

「いや、別に……ただ、あんな奴に先を越されるとは思ってたね」

「……あっそ」

と、呆れるマリアド。

ソールハロツシュは少し考える様子を見せてから、そつと距離を縮めた。

「……離れるよ」

と、端へ寄るマリアド。

「嫌だと言ったら？」

「それはこっちの台詞だ」

向かいではゼーシュとフュエリが見ていた。

構わずに距離を詰めるソールハロツシュ。

「どうせ、もうファーストキスは奪われたんだ。良いだろう？」

「嫌だ」

「どうして？」

問うソールハロツシュに、マリアドは相変わらず冷たい言葉を放った。

「俺は変態は嫌いだ」

「……変態って、そんな」

と、苦笑いを浮かべるソールハロツシュ。

仕方なく元の位置へ戻ったソールハロツシュだったが、その直後

に馬車が揺れた。

その反動で彼の方へ倒れ込むマリアド。

「うわっ」

とっさにその身体を抱き留めたソールハロツシュは、にやりと笑った。

「……ちよ、ま、やめ、やめろ！」

嫌な予感を感じて叫ぶマリアドだが、間もなくその唇はソールハロツシュに塞がれてしまう。

「よし、これでマリアドはオレのもの」

と、喜ぶソールハロツシュだったが、ゼーシュが唐突に口を開く。

「ニゲル、あの変態の口を封じて」

「きゅう！」

ぽふっとソールハロツシュに飛びかかるニゲル。

「うわ、ちよ、やめろ、何してるんだ、おま」

「きゅうつ、きゅうつきゅう！」

ぺろぺろと唇を舐められて、ソールハロツシュの身体からだんだんと力が抜けていく。

一方、マリアドは唇に手を当てて呆然としているのだった。

・マリアド

「ちょっと聞きたいんだけど」

と、マリアドはソールハロツシュに声をかけた。

「何だい？ 何でも答えてあげるよ」

何を期待しているのかにこにこしている彼の気持ちを無視し、マリアドは問う。

「俺のさ、この『マリアド』っていう名前は、どーいう意味なんだろう？」

「何だ、そういうことか」

ソールハロツシュはマリアドをまじまじと眺めてから言った。

「『可憐』って意味だよ」

「嘘教えるな」

何の根拠もないのに嘘だと決めつけるマリアド。

ソールハロツシュは仕方なく返した。

「分かったよ、本当は『清純』っていう」

「もういい」

さっさと見切りをつけ、マリアドはソールハロツシュへ背を向けた。

「名前の意味、ねえ……」

と、考える様子でネネルは言った。

「そうね、言うなら『愛らしい人』ってところかしら」

「はあ？ お前までそんなこと言うのかよ」

と、マリアドは反抗した。

「あら、あたしの他に誰が言ったの？」

「変態魔術士」

「ああ、なるほど」

と、納得するネネル。

マリアドはもう一度尋ねた。

「で、意味は？」

「だから、『愛らしい人』よ。あながち間違っていないはずだけど？」
ネネルの言葉をまだ受け入れず、マリアドは彼女へ背を向けた。
「からかうのはよせ」

そしてさつさと去ってしまう。

ネネルは息をついた。

「間違えてないはずなのに」

「え、『マリアド』の意味ですか？」

「うん、ジャスナなら嘘言わないだろうと思ってさ」
と、期待の目を向けるマリアド。

しかしジャスナは悩み始めた。

「そうですね……うーん……意味、となると……」
ちらつとマリアドを見やって、控えめに言う。

「『美しい人』でしょうか」

「……本当に？」

「い、いえ……違うかもしれません」
と、ジャスナ。

マリアドは溜め息をついた。

「やっぱ、名付け親に聞くのが良いかな」

「え、名付け親ってもしかや……」

はつとするジャスナへ、マリアドは申し訳ない顔をした。

「ああ、いや、神様じゃないんだ。俺に名前をくれたのは、フィアンシーナ姫なんだ」

「そうでしたか……初耳です」

仕方なく姫の部屋を訪ねたマリアド。

「え、意味ですか？」

「ええ、この名前にはどんな意味があるのか、ちょっと疑問に思い

まして」

と、笑うマリアド。

フィアンシーナはすると、にっこり微笑んだ。

「特に意味なんて在りませんわ」

「え？」

「『マリアド』は、フィアンシーナの作った創作ですもの」

マリアドは呆然とした。

「強いて意味を付けるなら……『純情可憐』、『愛らしい女性』ってところですわね」

にっこり微笑む姫の前に、マリアドは乾いた笑いしか返せなかった。

・第三章 7 の If

「ところで、お前は俺のこと、どう思ってる？」

「え？ それは……えーと、そうですね」

何故だか悩み始めるメイド。さっさと答えるよ、と言いたかったがやめた。

「その、私はどちらかというと中性的な方が好みなので、マリアド様にはとても魅力を感じます。ですが、やはり実際に交際をするとなると話は違ってきてまして……」

「で、つまり？」

「つまり……その、マリアド様はどうも受け身のようなので、同じく受け身の私としては、相性が合わないかと」

あれだ、フュエリはやはり抱かれないタイプなわけだ。誰かに抱かれないのだから、俺では駄目というわけ。

「あと、それに加えてマリアド様には」

と、何か言いかけてはつとするフュエリ。

「何だよ？」

反射的に尋ねたら、彼は俺の顔色を伺うようにして言った。

「その……マリアド様には、ソールハロッシュ様がいらっしゃるわけですから、邪魔をするわけにもいかないと思ひまして」

「……ああ」

考えて、思わず鼻で笑ってしまった。

「ねーよ、絶対にそれはねえ。むしろ俺から気を逸らして欲しいくらいだ」

フュエリがぽかんと口を開けて俺を見ていた。

「で、ですがマリアド様は……」

「ただの玩具だよ、あんなん。分かりやすく俺に惚れてるから遊んでやってるだけだ」

と、にっこり微笑む。

するとフュエリは、そそくさと片付けをして部屋から出て行ってしまった。

If その2

「ところで、お前は俺のこと、どう思ってる？」

「え？ それは……えーと、そうですね」

何故だか悩み始めるメイド。さつさと答えるよ、と言いたかったがやめた。

「その、私はどちらかというと中性的な方が好みなので、マリアド様にはとても魅力を感じます。ですが、やはり実際に交際をするとなると話は違ってきてまして……」

「で、つまり？」

「つまり……その、マリアド様はどうも受け身のようですので、同じく受け身の私としては、相性が合わないかと」

あれだ、フュエリはやはり抱かれないタイプなわけだ。誰かに抱かれないのだから、俺では駄目というわけ。

「あと、それに加えてマリアド様には」

と、何か言いかけてはっとするフュエリ。

「何だよ？」

反射的に尋ねたら、彼は俺の顔を伺うようにして言った。

「その……マリアド様には、ソールハロツシュ様がいらっしゃるわけですから、邪魔をするわけにもいかないと思ひまして」

「……な、何言ってるんだよ！」

思わず恥ずかしくなつて顔を逸らす。

「別に、俺はあいつのことなんてどうとも」

「お言葉ですが、それがいけないのです。マリアド様はもっと素直になられた方が可愛いんですから」

「っ……………!!」

何でだ、何でフユエリには分かってしまっんだ！？

恥ずかしさに耐えきれず、俺はベッドへダイブした。

「もういいっ、出てけ！」

フユエリはくすくす笑うと、片付けをさっさと終えて部屋を出て行った。

キャラクター設定まとめ（前書き）

本編で設定を活かせなかったため、こちらにまとめさせていただ
きます。

飽くまでも参考程度に留めて下さい。

キャラクター設定まとめ

<メインキャラクター>

マリアド

18歳(見た目) 170cm 神の使者

ネネル

20歳 148cm 宮廷魔女

ヴェルシ

20歳 172cm 女騎士

ゼーシュ

15歳 158cm 騎士見習い

ソールハロツシュ

22歳 180cm 宮廷魔術士で公爵

フュエリ

19歳 174cm メイド

ジャスナ

16歳 160cm 巫女

フィアンシーナ

17歳 156cm 姫

ルアンザ

15歳 156cm 双子姉で兄

ユヴァイン

21歳 178cm 黒幕の黒妖精

<その他>

セリン 21歳

<おそらく非公式カップリング>

ソールハロツシュ×マリアド

ネネル×マリアド

ソールハロツシュ×フュエリ

マリアド×ゼーシュ

ヴェルシ×ジャスナ

ルアンザ×ジャスナ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8363s/>

つまり真ん中で良くな？

2011年8月7日03時16分発行